

『悪役令息に転生したら貴公子から溺愛されました。』

著：高月紅葉

ill：岡本K宗澄

ひたひたと、しずくが落ちてくる。

額や頬に触れているらしい。

それよりもなによりも、時間が気になった。始業開始一時間前にはデスクに座っているのが、社畜のルールだ。

体調が悪いから病院へ寄りたいと電話連絡を入れただけで、それでも社会人かと罵声が返ってくる。胃がぐっと重くなり、背中がキリキリと痛みはじめた。頭がぼんやりとして、駅から会社へ続く道の途中で足を止める。橋の上だ。よろけて欄干を掴んだつもりが、腕はその遙か向こうへ伸びていた。

声を上げる気力もなかった。取り落とした携帯電話からは盛大な怒鳴り声が響き渡った。

ブラック企業に勤めて二年と少し。

(次に生まれ変わったら……人に罵られても笑ってるみたいなの、ゲキ強なメンタルに、なりたい……。悪役みたいなの、嫌われ者みたいなの……。そんなものに、俺は、なり、たい……)

またしてもしずくが落ちてきて、重たいまぶたを嫌々ながらに押し開く。すると、びしょ濡れになった美青年が見えた。

「ウィル！ ウィル！ しっかりしてくれ」

頬をパチパチと指先で叩かれる。美青年が遠ざかり、ぼんやりとした視界いっぱい緑が広がった。木の枝に繁った葉の重なりが揺れて、きらめくような陽差しがこぼれ落ちてくる。

「……て、ん、ごく……」

くちびるは空動きにしかならず、声は出てこなかった。

「こちらだ！ こちらに来てくれ！ 意識が戻ったばかりだ」

青年の声が今度は遠くから聞こえてきて、大勢の足音も近づいてくる。橋の欄干を掴みそこねて川へ落ちたけれど、どうやら助かったらしいと自覚した瞬間、気持ちが萎えた。

会社にまた連絡を入れなくてはいけない。山のように溜まっている業務をこなして、メールを捌いて、取引先には頭を下げ、先輩からはネチネチとした小言を、上司からは理不尽な罵倒を浴びせられる。働くための意欲はとうに尽きていたが、どうしても毎日のルーティンから抜け出せない。そんな負の感情が、どっと流れこんできて混乱する。

「……ウィル。すまなかった」

青々とした木々の葉が隠れて、貴公子然とした青年がまた視界を占めた。彼の名前は知っている。コナー・フィンレー。年上の従兄弟だ。

そう閃いた瞬間、右の腕に強烈な痛みが走った。声にならない叫びを上げると、飛びあがった両肩をコナーの腕に押さえつけられた。

「か、かいしゃに……れんらく……」

耐えがたい痛みに朦朧としながら、電話番号を口走る。だが、かすれた声はだれにも拾いあげてもらえなかった。当たり前だ。ここはもう、社畜として生きていた世界じゃない。

「しっかりしろ。……君みたいな相手でも、これでは寝覚めが悪い」

肩を押さえるコナーが祈るように言った。その腕へ左手をすがる。応えるように、ぎゅっと強く掴まれて、ほんの一瞬だけ心が凪いだ。

(もう、連絡……いらないんだ……)

そして意識は途絶えた。

次に目が覚めたときは、豪華なベッドの上へ寝かされていた。

天蓋を支える柱に見事な細工が施され、青のグラデーションが美しい半透明の布が三方を覆う。ヘッドボードには織りの美しい布が貼ってあり、その向こうは植物柄の壁紙だ。

数日は高熱にうなされて過ぎ、あとの数日は倦怠感に苛まれた。

部屋の片隅には常に老婆が座り、うめき声を聞きつければ、すぐに様子を確認される。彼女の衣服は不思議なほどクラシックで、部屋のしつらえには似合っていたが違和感しかない。

医者らしき中年男性や汗を拭いてくれるメイドらしき女性たちも、みんながみんな、まるでおとぎ話のようなファンタジー世界の扮装をしていた。

耳から流れこんでくる言葉は、日本語でも英語でもない。けれど、日本語と同じように理解できた。

だれもが『ウィルさま』と呼びかけてくる。それが、自分の名前であることはすぐに理解した。正式名称は、ウィル・ジョーンズ。鏡を覗けば、びっくりするような美少年が映る。

記憶にうっすらと残った、さえない社会人の姿とはまるで違い、髪は美しいプラチナブロンドで、肌は抜けるように白い。ほっそりとした手足は、華奢なわりに薄い筋肉がついている。少年と青年の過渡期にあり、性別は男だ。胸はなく、つくべきものがついている。そのあたりの毛もブロンドで薄く、ちょっとなまめかしい雰囲気でした。

(夢だな……夢だろうな)

橋から落ちて川に流され、意識を失った。そのことは覚えている。それしか覚えていない。

いま、はっきりしていることは、右肘先が疼いて痛む現実だ。

転生ファンタジーのアニメを見すぎたかもしれない。無職の主人公が転生するのを見て、せめていまずぐ無職になりたいとビールを飲むのが日課だった。

(その俺が……なんだ、これ)

夕暮れが近づき、部屋のランプに明かりがつく。電気ではなく、ガスだ。

記憶も知識もあいまいで、考えれば考えるほど現実感が失われていく。なによりも、以前の名

前を思い出せなかった。代わりに、ウィルとしての記憶はうっすらとよみがえる。

(まあ、いつか……)

そう考えて、目を閉じる。二十四年生きてきたが、この二年ほどの生活は地獄だった。就職に失敗するということの神髄を知らなかったのだ。

(たぶん、鬱を乗り越えて、おかしくなっていたらなあ……)

柔らかな枕に頬をすり寄せ、動かすと痛む右腕をそっと撫でた。

(俺の転生無職ライフ……終わりませんように……)

休日でも深夜でもお構いなく着信のあった携帯電話の存在は遠い。幻のようなバイブ音も、この十数日のあいだに意識から消えかかっている。安堵の息をつくとき、心は想像以上に軽くなった。

部屋の扉がノックされ、しばらくしてメイドが入ってくる。

「お食事をお持ちしました」

「……うん」

としか、まだ返事ができない。『ウィル』は湖で溺れ、助け出されるときに大量の水を飲んだ。それが理由かどうかは医者にもわからないが、喉はまだ痛む。

「あの、お医者さまの言いつけで……。どうしても、と……」

メイドはなにかの名前を口にしたが、声が小さすぎて聞き取れない。

「……うん」

からだを起こしてうなずいた。それだけの反応だったが、ウィルの背中にクッションを詰めてから食事の支度を始めたメイドの肩が、不自然に大きく揺れた。ベッド用のテーブルを手にしてあとずさる。

「ウィルさま……。あの……」

「うん？」

視線を向けると、メイドはまたしてもあたふたとろたえる。そこへ年老いたメイドが入ってきて、深々とお辞儀をした。ウィルが寝込んでいたあいだ、体調変化を見守るためについていた老女だ。

「なにか、粗相がありましたでしょうか」

部屋の雰囲気を感じた問いかけに、若いメイドが小声で答える。

「……あの、今夜のスープはニンジンで……」

「ああ、それは」

ふたりはこそこそと会話を交わし、ちらりとウィルを見た。どうやら、これまでの『ウィル』であれば、絶対に拒否する食材らしい。

(ウィルらしく……か)

きりっと眉を吊り上げ、首を左右に振って見せた。

ふたりのメイドは、あぁと小さく声を上げる。うかつにニンジンのスープを差し出し、皿を投げつけられなくてよかったと言いたげにおおげさな反応だ。

彼女たちはいつも遠慮がちで、おずおずと腰が低く、腫れものにでも触るようにふるまう。ウィルは、よっぽど嫌なお坊ちゃんだっらしい。

そこへもうひとり、訪問者が現れた。ドアをノックする音に特徴があり、振り向くまでもなくコナーだとわかる。メイドがドアを開けると、柔らかな足音が近づいてくる。

「調子はどうだい」

ベッド脇に立った黒髪のコナーは、今日もまた見惚れるほど凛々しく整った顔だちをしていた。口調だけがそぞらしいほどに優しく、その目はするりとウィルから逃げた。

「ああ、ニンジンのスープが気に入らないのか。きみは偏食だから」

言葉にさりげない棘を感じたが、なにを答えるべきなのかもわからない。黙っていると、コナーがベッドから離れた。

「ニンジンが多めに入っているだけで、味付けはどのポタージュとも変わらない。食べておかないと……」

言いながら、トレイを手に戻ってくる。その姿を見た瞬間、喉へ手を当てた。

息が詰まったのは、ふいに記憶が混濁したからだ。焦燥感を伴って押し寄せてくるのは、湖で溺れたとき、前世の記憶と引き換えに失ったウィルの記憶だ。この数日で、記憶の断片や感情が途切れ途切れによみがえり、ウィルとしての知識らしきものの輪郭が生まれている。

(いけすかない、完全無欠の従兄弟殿……)

頭に言葉が浮かんでくる。と、同時に、コナーを振り向く。

喉に当てていた手がはずれ、タイミング悪く、彼の持ってきたトレイの上へ落ちた。スープの皿が飛んで、メイドたちが悲鳴を上げる。

「あ、ごめん……っ」

悪気はなかったと言いかけて、声が出たことに気づく。日本語のつもりで話したが、口から出てきたのはこちらの言葉だ。

「ウィル……」

コナーの唾然とした声が聞こえ、メイドたちまでピタリと動きを止めた。

「熱でもあるのか」

大きな手のひらが額へ伸びてきて、肌をスツと撫でられる。

「お医者さまをお呼びしましょうか」

年老いたメイドがあたふたと近づいてきた。若いメイドは、床にぶちまけられたスープの片付けを始めている。

「熱はないよ。医者はいらない」

コナーの指先から逃れて言葉を発する。そして、右腕の傷をかばいながら掛け布団のなかへもぐり込んだ。

「昨日と同じスープがいい。あと、パンも欲しい」

首から上だけを出して言ったあとは、機嫌を損ねたふりで布を引きあげた。

(俺の、記憶……。どうなってんだ……)

転生なのか、転移なのか。その区別はまるでつかない。ただ、うすぼんやりとしたふたつの記憶が混在しているだけだ。

(やめよ……。深く考えてもしかたない)

なによりもたいせつなのは、会社に行かなくていいという『現実』だ。

「……たくさん食べて、早く元気になることだな」

コナーの声がくぐもって聞こえ、足音が遠ざかっていく。メイドたちは床を掃除したり、ベッドが汚れていないかを点検したりするのに忙しげだ。

ウィルは布から顔を出し、うんざりするほど眺めた天蓋の模様をまた見つめる。

(早く、元気に……。？ 思ってもいなくせに)

じくじくと痛みだした右の肘先を押さえながら、メイドを呼んで痛み止めの薬を頼む。

川の橋の上で落ちる瞬間を覚えているように、湖へ漕ぎだしたボートの上で口論になったことは知っている。相手はコナーだった。そこでならウィルを逃がすことなく諭せると思ったのだろう。辛辣な言葉をいくつも投げつけられ、ウィルはボートの上で立ちあがった。危ないと諫められても、我を張ることだけが特技の嫌われ者だ。

そして、バランスを崩し、湖へ落ちた。

コナーが責任を感じているとしたら、それはもっともな話だ。

この夏、ウィルは実家であるジョーンズ家の避暑に同伴を許されなかった。代わりに、親族であるフィンレー家の別荘へ行き、コナーと過ごすように命じられた。どちらの家も貴族階級に属しているから、ふたりは正真正銘の貴公子だ。

コナーは、静かな避暑地へ投げこまれた闖入者に冷たかった。

それも、そのはず。気ままわがままが服を着て歩いているようなウィルの性格を彼はよく知っていたし、これまでも幾度となく迷惑をかけられてきた。ここへ来てから嫌われたわけではなく、初めから相性は悪かったのだ。

山深い場所にある牢獄のような別荘なので、問題行動の起こしようもないはずだったが、ウィルはやはり小さな騒動を繰り返し、働く人々を困らせたらしい。

結果、別荘の主であるコナーが苦言を呈することになったのだ。湖へ出かけ、そこで膝を突き合わせて話をしようと試みたのだろう。

「まだ、腕が痛むのか」

ゆっくり歩を進めていたコナーが立ち止まり、斜め後ろについていたウィルも足を止める。ようやくベッドから出てもいいと医者から言われ、一日一回の散歩が一日三回へ増えたばかりだ。常にコナーが同伴し、つかず離れず歩いている。

会話は特になかったが、白樺の群生や葉擦れの音、鳥の鳴き交わす声や飛び立つ音に耳を傾けていれば、それだけで間が持つ。

ウィルの右腕は、まだ三角巾で首から吊られていて、激しく動かすことは禁じられていた。表

面的な傷は塞がっていたが、湖の底に沈んだ木の枝に貫かれた傷は見た目よりもずっと深い。

「振ったりぶついたりしなければ、平気だけど」

そう答えると、すっきりとした立ち姿のコナーが首を傾げた。濡れたように艶めく黒髪がさらりと流れる。

「そのわりには、ゆっくり歩くんだな」

後ろ手に片腕を回して立つ姿は、足先から頭の先まで芯が入ったようにまっすぐだ。リネンで作られた夏服は風をはらんで揺れ、生成り色も清潔感があって清々しい。

年齢は二十六歳。まだ結婚はしておらず、領地管理の手伝いと文学の研究が彼の仕事だ。十八歳のウィルとは体格も違う。そもそも、同じ親族でも、違う遺伝子を受け継いでいるふたりだ。コナーは美丈夫と呼ぶのに相応しいが、ウィルはだれが見ても美少年そのものだった。

「そんなに急いだら、もったいない」

ウィルが答えると、コナーは意外そうに眉を跳ねあげた。ほんの一瞬だけ見せた嘲りを隠すしぐさだ。

「どうして？」

きみらしくもない。そう言われた気がしたが、ウィルは気にせずあたりをぐるりと見渡した。木々の香りが風に乗って運ばれ、湖から漂うように広がる水の気配と混じり合う。陽差しは夏の盛りを迎えた枝葉に遮られ、足元にも木の幹にも、きらきらとした細やかな光が弾ける。

「だって、きれいだから。……ホッとする」

胸にじんわりと広がる安堵は、ブラック企業の社畜生活から逃れた喜びでもある。

「おれも人間だったな……って」

「ウィル。記憶が混濁しているというのは本当なんだな」

「メイドたちから聞いたのか」

コナーからは目をそらさなかった。彼のしぐさも、あたりの自然と同じく、見ていて気持ちがいい。

「医者もそう話していた。……きみを水へ落とすつもりはなかったんだ」

「なにを叱られてたのかは、覚えてないよ。恨みにも思っていない。だからさ、散歩にだって付き合ってくれなくていいんだけどね」

「……これは、私の気晴らしだ」

両肩をすくめたコナーが、からだの向きを変えた。一步を踏み出す瞬間の、体重移動さえ美しい。ウィルに合わせてゆっくり歩を進めるのも、だらだらとした足の運びではなかった。片足がスッと伸びて柔らかく地へ降り、伸びたままの上半身がスライドしていく。そして、残された足がなめらかに動き、次の一步へ繋がっていく。

（見たことない、人種だな……）

ウィルとしての記憶はまばらで、湖へ落ちる前のことはほとんど思い出せない。これまでの経歴も家族の名前もおぼろげで、まだだれにも確認していなかった。

「あのさ、コナー。……リンデルってどんなところ？」

後ろ姿を眺めながら声をかけた。

「リンデル……。南にある村だな。豊富な種類の花が野に咲くほかは、なにもない。丘に広がる畑の村だ」

「いいところ？」

「……この散歩道を愛する心が、きみに芽生えたならね。社交場はないところだ。退屈だよ」

コナーは振り返りもせず、肩をかすかに震わせた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<https://www.fwinc.jp/daria/>